

「東日本大震災—その時、学校は」



あの日から7年が経過しました。石巻出身の私としても特別な一日です。平成23年3月11日（金）午後2時46分。未曾有の大震災は私たちからかけがえのない尊いものを奪いました。写真左上は今年の3月11日の石巻日和山公園から眺めた旧北上川です。少しずつ建物は増え、内海橋や中瀬公園の改修は進んでいますが、復興はまだまだ道半ばです。

本校では3月11日の「みやぎ鎮魂の日」に合わせて毎年防災集会を開いてきました。今年石巻専修大学非常勤講師 鈴木洋子先生（震災当時石巻市立門脇小学校校長）をお願いしてお話を伺える機会を得ました。

全校集会から引き続いての6年生のいずみタイムでは門脇地区の歴史や先生がご退職間近の最後の朝会で「桃花笑春風（とうかしゅんぷうにえむ）」という言葉を用いたお話をしたことなどを紹介していただきました。そしてその日の午後に大きな揺れと大津波に学校や地域が襲われました。

鈴木先生のお話からいかに避難訓練を真剣に行うことが大事かということを改めて教えていただきました。そして、避難訓練も大切ですがもっと大切なことについて私たちに教えていただきました。

それは**日常生活をきちんと行うこと**です。

当時、門脇小学校では「廊下は静かに歩くこと」「朝会や集会の集合整列は静かに整然と行うこと」「話をしっかり聞くこと」の3つを生活目標に掲げ、全校で徹底して取り組んでいたそうです。鈴木先生のお話を伺っていて、何よりも強く感じたのは子どもたちや職員を預かっていた職責の重さ、そして強い信念とリーダーシップです。だからこそ先生はご自身の学校経営の中で、3つの生活の目標を掲げ、その実現に徹底されていたのだと教えられました。避難訓練の想定を遥かに超える大地震や大津波に襲われても迅速な避難行動に結びついたのは、門脇小学校での日常の指導の賜物に違いありません。

電気がつき、水道が出て、温かいごはんが食べられる、そんな日常の繰り返しの中にと、自分の中であの日のお出来事が過去のようになるところがあります。当たり前が当たり前で、そして人と人の絆の大切さを改めて実感したのもあの震災でした。震災の記憶を決して風化させることなく防災の大切さをいのちの大切さを語り継いでいくことこそ、被災地にある附属学校の使命であると思いを新たに1日でした。

